

# 『今昔物語集』（本朝部）の人間像にみる時代の息吹

——卷三二 第六話の読解を中心に——

福島 尚

## はじめに

「息吹」という統一テーマを持つ連続講義のひとつコマとして、『今昔物語集』にみる人間像」という題目での講演依頼を受けた。周知のとおり、『今昔物語集』は、インド・中国・日本の説話を、仏教的の世界観のもと、国別に、そしてテーマ別にきわめて整理されたかたちで集成しようとした大説話集である。したがって、『今昔物語集』にみる「では、あまりに対象が広漠としているので、『今昔物語集』の『本朝部』にみる人間像」という題で話をすることにした。私に推察するところ、『今昔物語集』には、仏教にかかわる説話を中心としながらも、世俗の説話をも豊富に収録していて、そこには、貴族だけでなく新興の武士から庶民・盗賊に至るさまざまな人物が登場し、混沌たる時代をたくましく生き抜く人々の姿がリアルに描かれていると、一般には理解されているので、「息吹」という統一テーマに好適なものとして選ばれたのだと思う。そう考えて、講演の当日は、卷三〇第八話（安積山の歌物語）と卷三二第六話「加茂祭の日、一条大路に札

を立てて見物する翁の語」とを取り上げ、ゴールとしては、卷三二第六話の主人公たる、西ノ京八条あたりに住まう刀禰の翁の振る舞いに、「時代の息吹」を読むという構想で話をした。本稿は、その講演の内容を基に、新たに書き下ろしたものである。

## 一 『今昔物語集』（本朝部）の叙法

さて、「はじめに」で、「さまざまな人物が登場し、混沌たる時代をたくましく生き抜く人々の姿がリアルに描かれていると、一般には理解されている」といったが、そうした理解故に、『今昔物語集』（本朝部）は、日本史学の世界でもしばしば利用されている。その研究史的整理は、例えば、西山良平『「今昔物語集」と日本史研究』（安田章編『鈴鹿本今昔物語集 影印と考証』京都大学学術出版会・一九九七年、所収）に整理されている。そこで、西山氏は、日本史の『今昔』研究の課題の第一として、『今昔』の時代性・歴史性の検証を不可欠なものとして挙げられているが、しかしその問題への対処は「以

外に杜撰である」と述べられている。本稿で、私は、日本史の史料として『今昔物語集』(本朝部)を扱おうというわけではないが、そこに「時代の息吹」を読もうとする以上、この問題を素通りすることはできない。そこで、注目すべき先行研究によりながら、本稿の依拠する立場を明らかにしておきたい。西山氏の論考を収める同じ書中に、勝田至「『今昔物語集』の地域社会」という論が収められており、その冒頭に「『今昔物語集』の時代設定」と題する章がある。そこで勝田氏は、これまでの日本史研究のみならず日本文学研究の成果をもふまえ、いくつかの例を挙げながら考察を進めて、次のように言われている。

歴史的研究の素材としての『今昔物語集』がいつの時代を描写しているのかについて、一応次のように考えておく。(1)説話のモチーフと密着した歴史的制度(たとえば国司が任国に赴く)は、原撰説話の成立した時期の状況を示す。(2)細部の制度名(宣旨、郡司、郷の刀禰など)は、『今昔物語集』編者が編集時点(院政期)の常識を適用して改めている可能性が高い。(3)説話中の情景や人物の行動は、編集時点(院政期)の現実社会でも起こりうるものとして描写していると思われる。へ中略へ『今昔物語集』のデティルが院政期の描写とみなしてさしつかえないとすれば、まずは一安心といったところである…

さらに、千本英史「『今昔物語集』―永遠の未完成の魅力―」(『国文学解釈と鑑賞』・第七二巻八号・二〇〇七年八月)において、千本

氏は、文学研究の立場から、勝田氏の説を引きながら、「『今昔物語集』は、それが編纂されていた院政期の視点で、撰関全盛期以前を描いた作品」であり、「取り扱われたことがらが『今昔物語集』が編纂されていた院政期の目を通して解釈・体感されている」、「『今昔物語集』の空間的視座は、あくまで都市・京都にあり、京都の町並みでの都市民の存在感は圧倒的である」と述べられている。

本稿では、これらの見解に基づきながら、以下に『今昔物語集』(本朝部)の説話に登場する人間像に時代の息吹を読みとってみようと思う。

## 二 卷三〇第八話(安積山の歌物語) にみる『今昔物語集』の叙法

本節では、卷三〇第八話(安積山の歌物語)を取り上げて、「何らかの書承関係が推測される」(完訳日本の古典『今昔物語集』)とされる同話である『大和物語』第一五五段と比較しながら、『今昔物語集』の叙法の特徴を見てみたい。

卷三〇第八話の梗概は、「完訳日本の古典」本の記述を借りれば、次のようである。

大納言家に仕えた内舍人某がふと垣間見た姫君に思いこがれ、直訴と見せかけて姫に近づき、姫をさらって逃走し、陸奥国安積の山中に庵を構えて同棲したが、やがて懐妊した姫は、男の留守中に山中の井戸にわが顔を映し見て面やつれの甚だしきを恥じて嘆

き死に、帰ってきた男も姫の死を嘆いて死んだという話。

『大和物語』第一五五段も梗概化すれば同様の話だが、話の分量・話の語られ方は相当に異なる。

まず、話の発端の部分、『大和物語』が、「昔、大納言の、むすめいとつくしうてもち給うたりけるを、帝に奉らむとてかしづき給ひけるを、殿に近う仕うまつりける内舍人にてありける人」と、始まる部分、『今昔』は、「今昔、「天皇ノ御代ニ、大納言「」ノ「」ト云フ人有ケリ。子共数有ケル中ニ、形チ美麗、有様微妙キ女子一人有ケリ。父ノ大納言此ヲ愛シ悲デ、片時傍ヲ不放ズシテ養ヒ傳テ、天皇ニ奉ラムトシケルニ、其ノ家ニ侍ニテ被仕ケル内舍人「」ノ「」ト云フ者有ケリ」とある。

もともとこの話は、古今集仮名序に「手ならふ人のはじめにもしける」とも記されて著名な「あさか山かげさへ見ゆる山の井の」という伝承歌をめぐる歌物語で、『万葉集』巻十六（有田縁并雑歌）三八〇七番歌左注や古今集仮名序の注では、次のような別伝承を持つ（いずれも『新編国歌大観』により引用）。

安積香山 影副所見 山井之 浅心乎 吾念莫国

（あさかやま かげさへみゆる やまのみの あさきこころを わがおもはなくに）

右歌伝云、葛城王遣<sub>二</sub>于陸奥国<sub>一</sub>之時、国司祇承緩怠異甚、於<sub>レ</sub>時王意不<sub>レ</sub>悦、怒色顯<sub>レ</sub>面、雖<sub>レ</sub>設飲饌、不<sub>レ</sub>肯宴樂、於<sub>レ</sub>是有前采女、風流娘子、左手捧<sub>レ</sub>觴、右手持<sub>レ</sub>水、擊<sub>二</sub>之王膝<sub>一</sub>、而詠此

歌、尔乃王意解、悅樂飲終日。

なにはづのうたはみかどのおほむはじめなり。へ中略へあさか山のことはうねめのたはぶれよりよみて、

かづらきのおほきみをみちのおくへつかはしたりけるに、くにのつかさ事おろそかなりとてまうけなどしたりけれどすまじかりければ、うねめなりける女のかはらけとりてよめるなり。これにぞおほきみの心とけにける。

あさか山かげさへ見ゆる山の井のあさくは人をおもふものは

このふたうたはうたのちちはのやうにてぞ手ならふ人のはじめにもしける

こちらの伝承も事実性がどれほどあるのか疑問であるが、『大和物語』・『今昔物語集』の伝承もそれが事実譚である保証はない物語である。であるにもかかわらず、『今昔』は、冒頭から、登場人物の固有名詞についてこだわりを示す。もともと『大和物語』のような物語なのだから、『今昔』の出典でもその名など明記されていなかったはずである。ところが、『今昔』編者は、わざわざ意識的欠文を固有名詞にあたる部分に設ける。のみならず、「「天皇ノ御代ニ」と出来事の時期さえ特定しようとする姿勢を示す。こうした意識的欠文の設定や姿勢は、『今昔』のそこに見られる『今昔』固有の方法である。かつて、池上洵一氏は、『今昔物語集』の猿神退治―巻廿六第七話を中心に―（『国語と国文学』・第五四卷一一号・一九七七年一月）

で、次のようなことを言われたことがある。

およそいかなる種類・性格の話であつても、『今昔』の撰者は、つねに世間話的な関心をもつて対処する。話の内容をつねに即物的に現実としてとらえ、その話の現実の中を生きる人間に対して、同じ現実を生きる人間としてのなまな関心を寄せながら話を受容しようとする姿勢が、動かしがたく確立していたように感じられる：

卷三〇第八話の場合も、もとは虚構の物語であつた可能性のある話であるにもかかわらず、編者はそれを「即物的に現実としてとらえ」ているからこそ、意識的欠文を設けてまで話の事実性にこだわりを示すのだろう。それは、『今昔』が仏法のもとにある世界の様々な実例を集めようとしたことともかわるのだろう。この話で、内舍人某がふと垣間見た姫君に思いこがれる場面、原文では次のようである。

「此ノ男、忽ニ愛欲ノ心深く發テ、思ヒ可寄クモ非ヌ事ナレドモ、其ノ後ハ万ノ事不思ズシテ夜ル昼、只此ノ姫君ノ有様ノミニ懸リテ、見マ欲ク難堪ク思ヘケル程ニ、畢ニハ病ニ成テ、物ナドモ敢テ不食ハズシテ、可死キ程ニ成ニケレバ」と、「愛欲ノ心深く發テ」という表現を用いている。『大和物語』では、「いかでか見けむ、このむすめを見てけり。顔かたち、いとうつくしげなるを見て、よろづのことおぼえず、心にかかりて、夜昼いとわびしく、病になりておぼえければ」とあるばかりで、「愛欲」という仏教的罪悪感をともなつた把握は見られない。

それから、直訴と見せかけて姫に近づき、姫をさらつて逃走しようとして企てるくんだり、『今昔』では、

返タス思ヒ縋テ、其ノ姫君ノ御方ニ有ケル女ニ会テ、「極タル大事ニテ、殿ニ可申キ事ノ候ヲ、姫御前ニ申サムト思給フルヲ、其ノ事申給ヘ」ト云ケレバ、女、「何事ヲ申サム」ト云ケレバ、男、「此ノ事ヲ極タル蜜事ニテ、人伝ニテハ否不申マジキ事ニテナム有ルヲ、己レ年来此ノ殿ニ仕テ内外無キ身也、忝クモ端ニ立出サセ給ヒタラバ、不人伝デ細カニ申サムト」ナム思給フルト云ケレバ、女其ノ由ヲ聞テ、姫君ニ、「此クナム申ス」ト忍ビヤカニ語ケレバ、姫君、「何事ニカ有ラム。実ニ其ノ男ハ親ク被仕ル者ナレバ、可憐キニモ非ズ。自ラ聞カム」ト「」云ケレバ、女此ノ由ヲ告レバ、「」喜キ物カラ心騒ギテ、心ニ思ケル様ハ、「今ハ生テ世ニ可有クモ不思エザリケレバ、同死ニヲ、此ノ姫君ヲ取テ、本意ヲ遂テ後ニ、身ヲモ投テ死ナム」ト思ヒ得テ、此モ云也ケリ。然バ男、世ニ有ラム事残り少ク思エテ、万ツ心細ク哀レニ思エケレドモ、此ノ心難思止クテ、彼ノ女ニ会テ、「彼ノ事何カニ。尚急ギ可申キ事ニテナム有ル」ト責ケレバ、女此ノ由ヲ姫君ニ申シケレバ、姫君何心モ無ク端ニ出テ、妻戸ノ有ル簾ノ内ニ立テ聞ムト為ル、夜ナレバ人モ無シ。男延ノ際ニ近ク寄テ、打出シ可申キ事モ無ケレバ、暫ク居タルニ、「奇異キ態ヲモシテムズルカナ。今ハ我が身ハ限也ケリ」ト思ヒ煩ヒケレドモ、只此ノ思ヒノ焦焼クガ如クニ思エケレバ、「然ハレ、死ナム」ト思テ、立走テ簾ノ中ニ飛入テ、姫君ヲ搔抱テ飛バガ如クニシ

テ、其ノ家ヲ出テ遥ニ去テ、人モ無カリケル所ニ将行ニケル。  
 〈中略〉姫君失踪後の大納言邸の混乱ぶりを描く。然テ彼ノ内舎人ハ、「此ノ事聞エナバ、我が身モ徒ニ成ナム」ト思ケレバ、「京ニモ否不有ジ。只遥ナラム方ニ行テ、野ノ中ニモ、此ノ姫君ヲ具シテ有ラム」ト思ヒ得テ、此ノ姫君ヲ馬ニ乗セテ、我レモ馬ニ乗テ調度掻負テ、陸奥国ノ方ヘ行ケルニ、只親ク仕ケル従者二人ヲ付テ行ケル。

とある。『大和物語』では、「せちに聞えさすべきことなむある」といひわたりければ、『あやし。なにごとぞ』といひていでたりけるを、さる心まうけして、ゆくりもなくかき抱きて、馬に乗せて、陸奥の国へ、夜ともいはず、昼ともいはず、逃げていにけり」ときわめて簡略に書いてあるところを、『今昔』では、姫君と内舎人との間に立つ女房とのやりとりを設定（これは、深窓の姫君に「其ノ家ニ侍ニテ被仕ケル」内舎人が物申すためには、現実には、当時の常識からして、姫君に仕える女房の取次ぎが必要との判断にもとづくものである）し、「喜キ物カラ心騒ギテ、心ニ思ケル様ハ、『今ハ生テ世ニ可有クモ不思エザリケレバ、同死ニヲ、此ノ姫君ヲ取テ、本意ヲ遂テ後ニ、身ヲモ投テ死ナム』ト思ヒ得テ、此モ云也ケリ」、「奇異キ態ヲモシテムズルカナ。今ハ我が身ハ限也ケリ」ト思ヒ煩ヒケレドモ、只此ノ思ヒノ焦焼クガ如クニ思エケレバ、『然ハレ、死ナム』ト思テ」、「此ノ事聞エナバ、我が身モ徒ニ成ナム」ト思ケレバ、『京ニモ否不有ジ。只遥ナラム方ニ行テ、野ノ中ニモ、此ノ姫君ヲ具シテ有ラム』ト思ヒ得テ」などと切羽詰った男の心情を語り手が思いやり、また、

遠い陸奥の国へ逃げるには、武装も従者も必要と「調度掻負テへ中略」只親ク仕ケル従者二人ヲ付テ行ケル」と描写する（陸奥国への逃走のくだり、『伊勢物語』の東下り章段（第六・八・九段）の措辞の影響あるか）。まさに「その話の現実の中を生きる人間に対して、同じ現実を生きる人間としてのなまな関心を寄せながら」話が語られている。しかも、注意すべきは、そこには、前掲の池上氏の論文中の「四『同じ死ニヲ』―行動力の起点―」で指摘されている、「いったん窮地に陥って死を目前にしてしまった主人公たちは、その絶体絶命との判断をてこにして、積極的に決死の行動に出る」という『今昔』固有の論理と表現とが用いられていることである。そうだとすると、ここに見られる叙述の改変は他でもなく、『今昔』編者の仕業とみてよさそうである。

以下、くだくだしいので述べないが、ここまで見てきたところによっても、『今昔』編者が、原話を現実的・即物的に受容しようとしている具体的様相が明らかになったであろう。本話の末尾に、「此ノ事ハ従者ノ語り伝タルニヤ。世ノ旧事ニナム云スル」と事実性にこだわるかのように伝承の経路に関心をはらつてみたり、「然レバ女ハ、徒者（「徒者」、東北大学蔵新宮城旧蔵本傍書ニ「従者」トアリ）也トモ、男ニハ心不許マジキ也、トナン語り伝ヘタルトヤ」といかにも通俗的な教訓的評語を付け加えたりするのも、そうした『今昔』編者の志向性によるものである。

## 三 卷三一 第六話「加茂祭の日、一条大路に

札を立てて見物する翁の語」を読む

前節では、卷三〇第八話を例として『今昔物語集』の叙法の特徴を見てきたが、以下、それを念頭におきながら卷三一 第六話を読み、そこに描かれた主人公である西ノ京八条あたりに住まう刀欄の翁の人間像などに「時代の息吹」を読んでみたい。梗概をひとまず「完訳日本の古典」本の記述を借りてしるしておけば、次のようである。

西八条（引用者注、「完訳日本の古典」本では、後に平清盛の西八条邸のあった地とするが、そうではなく、西ノ京の八条であろう）の刀欄の八十翁が、賀茂祭の行列に加わっている蔵司小使の孫の晴れ姿を見ようと、あらかじめ辻に高札を立て、あたかも陽成院の見物席のように思わせて、一人悠々と行列を見物した。院があとでそれを知ったがお咎めもなく、かえって関心なさったという話。

短い話なので、次に本文全部を引用する。

今昔、加茂ノ祭ノ日、一条ト東ノ洞院トニ、暁ヨリ札立タリケリ。其ノ札ニ書タル様、「此ハ翁ノ物見ムズル所也。人不可立ズ」ト。人其ノ札ヲ見テ、敢テ其ノ辺ニ不寄ズ。「此ハ陽成院ノ物御覽ゼムト被立タル札ナリ」ト皆人思テ、歩ノ人更ニ不寄ザリケリ。何況ヤ、車ト云フ物ハ、其ノ札ノ当リニ不立ザリケルニ、漸

ク事成ラムト為ル程ニ、見レバ、浅黄上下着タル翁出来テ、上下ヲ見上見下シテ、高扇ヲ仕テ、其ノ札ノ許ニ立テ、静ニ物ヲ見テ、物渡リ畢ニケレバ返リヌ。

然レバ、人、「陽成院ノ物可御覧カリケルニ、怪ク不御マサ、リヌルハ」「何ナル事ニテ不御覧ヌニカ」「札ヲ立乍ラ不御マサ、リヌル、怪キ事カナ」ト人口々ニ心不得ズ云合タリケルニ、亦人ノ云フ様、「此ノ物見ツル翁ノ気色ハ怪カリツル者カナ。此奴ノ、院ヨリ被立タル札」ト人ニハ思ハセテ、此ノ翁ノ、札ヲ立テ、「我レ所得テ物見ム」トテ為タルニヤ有ラム」ナド、様々ニ人云繚ケルニ、陽成院自然ラ此事ヲ聞シ食テケレバ、「其翁體ニ召シテ問ヘ」ト被仰ケレバ、其ノ翁ヲ被尋ケルニ、其ノ翁、西ノ八条ノ刀欄有ケル。然レバ院ヨリ下部ヲ遣シテ召ケレバ、翁參テケリ。

院司承リテ、「汝ゾ何カニ思テ、院ヨリ被立タル札」ト書テ、一条ノ大路ニ札ヲ立テ人ヲ恐シテ、シタリ顔ニ物ハ見ケルゾ」ト、「其ノ由體ニ申セ」ト被問ケレバ、翁申テ云ク、「札ヲ立タル事ハ翁ガ仕タル事也。但、『院ヨリ被立タル札』トハ更ニ不書候ズ。翁既ニ年八十二罷り成ニタレバ、物見ム心モ不候ズ。其レニ、孫ニ候フ男ノ、今年蔵司ノ小使ニテ罷リ渡リ候ツル也。其レガ極テ見マ欲ク思給ヘ候シカバ、『罷出テ見給ヘム』ト思給ヘシニ、『年ハ罷老ニタリ。人ノ多ク候ハム中ニテ見候ハバ、被踏倒テ死候ナム。益無カリケム』ト思給ヘテ、『人不寄来ザラム所ニテヤスラカニテ見給ヘム』ト思給ヘテ立テ候ヒシ札也」ト陳ケレバ、陽成院此ヲ聞シ食シ、「此ノ翁極ク思ヒ寄テ札ヲ立タリケ

リ。『孫ヲ見ム』ト思ケム、專理也。此奴ハ極ク賢キ奴ニコソ有ケレ』ト感ゼサセ給テ、「速ニ疾ク罷返リネ」ト仰セ給ケレバ、翁シタリ顔ナル気色ニテ、家ニ返テ、妻ノ嫗ニ、「我ガ構タリシ事、当ニ悪ヤ。院モ此ク感ゼサセ給フ」ト云テ、我レ賢ニナム思タリケル。

然レドモ、世ノ人ハ此ク感ゼサセ給不受申ザリケリ。但シ、「翁ノ、『孫ヲ見ム』ト思ケムハ理也」トゾ人云ケル、トナム語り伝ヘタルトヤ。

なお、本話については、中村修也『今昔物語集の人々 平安京篇』思文閣出版（二〇〇四年）の第一章「都人の楽しみは神社詣で」の第一節「賀茂祭を見物する翁」に、日本史研究者の立場からの解説があるので、適宜それをも参照する。

話は、賀茂祭の日の出来事から始まる。賀茂祭は、旧暦四月の中の酉の日におこなわれていた、初夏の都の年中行事。勅使一行は、宮中から紫野の斎院へ向かい、斎王と同道して下社へ、そこでの社頭の祭儀の後、上社へ向かい社頭の祭儀の後、奉仕した使・舞人などが還つて天皇の御前で歌舞を演じ賜宴などのある還立の儀となる。葵の葉で飾られたその華麗な行列を見物しようとする貴賤の人々で、沿道は大盛況であった。棧敷をしつらえ物見の牛車を立て並べた貴族の祭見物の有様は、中村氏の前掲書にも詳しく紹介されている。一条大路は、祭の当日、物見の人を乗せた牛車が立ち並び、棧敷がぎつしりと構えられ、警備のために検非違使が出動したという（『新潮日本古典集成』本の頭注参照）。その一条大路と東洞院大路との交差するあたりに、

暁がたから、「此ハ翁ノ物見ムズル所也。人不可立ズ」との高札が立てられた。この一条東洞院という地点は、中村氏前掲書によれば、「賀茂祭の行列と斎院一行が合流する最も祭列のにぎやかな場所」で「おそらく貴族と庶民が立ち並ぶ境界領域であったと想像されます」とも推測されている。

その高札を見た人々は、それを陽成院が見物しようと思つて立てられた札だと考えた。陽成院とは、第五十七代の天皇。八八四年、乱行のためということ、関白藤原基経により廃位された天皇だが、退位したのが十七歳、亡くなったのが九四九年で八十二歳のこと。この話の時は、その陽成院が翁と称しておかしい頃ということになる。

人々は、やんごとない方が場所を取っているのだと思つてだれも立ち入らなかつたところ、いよいよ行列も近づこうとする頃、やつてきたのは浅葱色（薄青色で、目立たぬ年配の者の服の色）の上下を着た翁。棧敷や牛車にいる人々を見上げ、路上に座つて居る人々を見おろして、得意げに扇を使つて、立て札のもとに立つて静かに見物をし、祭の行列が通り終わると帰つてしまった。もとよりその風体・立ち居振舞いからして、陽成院のような高貴な方ではありえない。

人々は、「陽成院ノ物可御覧カリケルニ、怪ク不御マサヅリヌルハ」、「何ナル事ニテ不御覧ヌニカ」、「札ヲ立乍ラ不御マサヅリヌル、怪キ事カナ」と口々に不審に思つて言い合つていたが、更に「此ノ物見ツル翁ノ気色ハ怪カリツル者カナ。此奴ノ、院ヨリ被立タル札」ト人ニハ思ハセテ、此ノ翁ノ、札ヲ立テ、「我レ所得テ物見ム」トテ為タルニヤ有ラム」などと、人々は様々に取りざたする。このあたり、世間の人々の口を介して、うわさがうわさと呼んで拡がっていく

様子が、生き生きと描かれている。院政期製作の『伴大納言絵巻』中巻末の、応天門放火の真相を目撃者の舍人が暴露し、その情報がうわさがうわさと呼んで拡がっていく様子を描いた場面が連想されたりもする。

こうしたうわさが自ずと陽成院のお耳に入り、その翁を呼びつけて問いただせということになって、その翁を探したところ、それは西ノ京の八条あたりに住まう刀禰だと判明した。刀禰というのは、中村氏前掲書によれば、「京職によって補任された在地性の強い下級官人」で、さらに説明を加えて、

陽成院が上皇として生存したへ中略へ十世紀までは、「七条令解」という史料によりますと、刀禰の多くは正六位の位階をもつ広義の官人でしたが、『今昔物語集』が書かれた十一世紀以降になると、官位をもたないまま刀禰職に補任される者も出てきます。刀禰の主な役割は、保内の家地等の売買の保証人を果たしたり、保内の非違の檢察といった警察的な業務でした。つまり、翁は庶民といっても、在地の長老的存在であり、広義の官人でもあった可能性もあるのです。

と述べられている者である。

翁は院より遣わされた下部に連行されて、院の御所に参上する。院司は、「汝ぞ何カニ思テ、『院ヨリ被立タル札』ト書テ、一条ノ大路ニ札ヲ立テ人ヲ恐シテ、シタリ顔ニ物ハ見ケルゾ」、「其ノ由儘ニ申セ」と尋問する。ここでは、うわさが伝わる過程で情報にゆがみが生じ

て、「此ハ翁ノ物見ムズル所也。人不可立ズ」という高札に、「院ヨリ被立タル札」と書かれていたというふうに変わっている。

そこで翁は申し開きをする。「札ヲ立タル事ハ翁ガ仕タル事也。

但、『院ヨリ被立タル札』トハ更ニ不書候ズ。翁既二年八十二罷リ成ニタレバ、物見ム心モ不候ズ。其レニ、孫ニ候フ男ノ、今年蔵司ノ小使ニテ罷リ渡リ候ツル也。其レガ極テ見マ欲ク思給ヘ候シカバ、『罷出テ見給ヘム』ト思給ヘシニ、『年ハ罷老ニタリ。人ノ多ク候ハム中ニテ見候ハバ、被踏倒テ死候ナム。益無カリケム』ト思給ヘテ、『人不寄来ザラム所ニテヤスラカニテ見給ヘム』ト思給ヘテ立テ候ヒシ札也」と。この申し開きの言葉は、異様なほど丁寧な言葉づかいがされている。自己卑下をあらわす、「罷り〇〇する」だとか、下二段活用 of 「給ふ」だとか、丁寧語の「候ふ」などが、しきりに使われている。これは、下衆に過ぎない翁が、たとえ間接的にせよ、この世の最高位にある陽成院に対して申し開きをするから、そうなのだと一応の理由付けをすることは可能である。しかしながら、それだけではなにかを、その馬鹿丁寧な言葉遣いから読み取ることが出来る。翁は、必要以上に自己卑下した物言い、高札に「院ヨリ被立タル札」などとは全く書いてないし、祭り見物それ自体が目的でもない、かわいい孫が「蔵司ノ小使」（御幣櫃を守護して参列する内蔵寮の史生）の大役を務める嗜れ姿をみたいという止むに止まれぬ事情で、高札を立てたのであって、決して祭り見物の人々を欺くつもりなどなかったのだと、いかにもあわれげに腰低く申し開きをして、この場をしのぐうとしたのだと考えられる。さきに見た、祭り見物の場では、翁は、棧敷や牛車にいる人々を見上げ、路上に座って居る人々を見おろし



て、得意げに扇を使って、見物をしたわけで、このことを考え合わせると、翁の申し開きを額面どおりに受け取ることはできない。高札の内容を見た人がそれをどう理解するかということも計算済みであつただろう。そうだとすると、高札を立てた行為も、また申し開きの仕方、翁のしたたかな計算に基づいたものであると考えられてくる。

ところが、陽成院は「此ノ翁極ク思ヒ寄テ札ヲ立タリケリ。『孫ヲ見ム』ト思ケム、專理也。此奴ハ極ク賢キ奴ニコソ有ケレ」と、孫の晴れ姿をみたいという動機を道理になつたものと認め、計略を用いた翁を「極ク賢キ奴」と評価し、無罪放免にしてしまう。これは、院が単に翁に上手く言いぐるめられたということでは必ずしもないと考える。というのは、陽成院は説話伝承の世界では「物狂い」の帝王としてのイメージをともなつて語られるからである。『今昔物語集』の別の箇所でも、巻二〇第一〇話に、陽成院が怪しげな外道の術を学んで、世の人から非難された場面があり、そこには本話（巻三一第六話）にも出てくる「世ノ人ハ此ク感ゼサセ給不受申ザリケリ」と同様の「世ノ人ハコノ事ヲ不受申ザリケリ」という文言が出てくる。とすれば、陽成院は、その性向の不適格性により、正しい処断を下せなかつたと解釈しうる余地もあるように読める。

一方、許された翁は、得意満面で家に帰つてきて、妻に「我が構タリシ事、当ニ悪ヤ。院モ此ク感ゼサセ給フ」といつて自賛した。だが、世の人々は、院がこの翁のふるまいに感心なさつたことを承認しなかつた（「此ク感ゼサセ給不受申ザリケリ」）。もつとも、そんな世の人、どうしても孫の晴れ姿をみたいと思つたという翁の心情には同情したらしく、この話は、「但シ、〔翁ノ、』孫ヲ見ム』ト思ケムハ

理也」トゾ人云ケル、トナム語り伝ヘタルトヤ」と語りおさめられている。なお、中村氏前掲書では、「孫ニ候フ男ノ、今年蔵司ノ小使ニテ罷リ渡リ候ツル」云々という話自体を翁の作り話だと解釈しているが、そうではあるまい。翁がいう「我が構タリシ事」というのは、その内容を見た人がそれをどう理解するかということも計算済みで「此ハ翁ノ物見ムズル所也。人不可立ズ」との高札を立てたことをいうのに限られるのではないだろうか。勅使行列の「蔵司ノ小使」は御幣櫃を守護して参列する内蔵寮の史生であるわけだから、どの誰が務めているかは調べようと思えばわかる範囲のことであるはずで、それが翁の孫かどうかはすぐにわかりそうなものである。

それにしても、この翁が祭り見物にあたつて巡らせた計略や振る舞い、院からの事情聴取の場での申し開きの仕方、許された時の得意げな様子は、にくにくしいものではある。しかし、その一方で、この翁の世渡りの上でのしたたかさ・たくましさをも感じる。そこには、貴族を頂点とした身分制社会であつた平安時代にあつて、きびしい世間を生き抜いていこうとする、庶民の強さが読みとれる。

#### 四 巻三一第六話にみる時代の息吹

ここで、本稿の第一・二節で確認したことを想起する。『今昔物語集』は、それが編纂されていた院政期の視点で、撰関全盛期以前を描いた作品であり、取り扱われたことがらが『今昔物語集』が編纂されていた院政期の目を通して解釈・体感されている。『今昔物語集』の空間的視座は、あくまで都市・京都にあり、京都の町並みでの都市民

の存在感は圧倒的である。しかも、その叙述は、話の内容をつねに即物的に現実としてとらえ、その話の現実の中を生きる人間に対して、同じ現実を生きる人間としてのなまな関心を寄せながら話を受容しようとする。これらの見方を本説話に当てはめてみる。

説話の時代設定は、陽成院（在位 八七六―八八四、生没 八六八―九四九、八十二歳にて崩御）が翁と称しておかしくない頃、つまり一〇世紀前半、『今昔』の撰述されていた時代よりも二〇〇年ほど昔であるが、『今昔』編者の、原話を院政期の目を通して解釈・体感し、それを現実的・即物的に受容する姿勢から考えて、刀禰の翁の生き生きとした描かれ方は（原話にもそれがあつた可能性も否定はできないが）、院政期を生きた『今昔』編者にとって、彼の直面する時代状況に照らして、現実性をもって理解できたものであるはずである。しかも、話に描かれた内容は、京都の町並みの中での都市民の行動である。その意味で、そこに生き生きと描かれた、翁の立てた高札をめぐる出来事や翁のしたたかな人間像は、『今昔』が院政期の目を通して解釈・体感して描き得た出来事や人間像だと理解してよいであろう。だとすると、そこに『今昔』の時代の息吹を感じ取ることに無理はないであろう。

最後に、参考までに、「やや簡略ながら同文性の同話で、へ中略／同原拠とみられる」（完訳日本の古典『今昔物語集』）『十訓抄』一の二八をあげておく（古典文庫本によるが、私に濁点や注記を加えた）。

昔、西八条ノトネリ（トネリ）、平仮名本諸本「刀禰」二作ル）ナリケル翁、賀茂祭ノ日、一条東洞院ノ辺ニ、コ、ハ翁ガ見

物センズル所也。人ヨルベカラズト云札ヲ、曉ヨリ立タリケレバ、人彼翁ガ所為トハ知ズ、陽成院物御覽ゼムトテ立ラレタル札ナメリトテ、人寄ザリケル程ニ、時ニ成テ、此翁アサギカミシモ着タリ（着タリ）、平仮名本諸本「にたか」二作ル）。扇ヒラキツカヒテ、シタリガホナル気色ニテ物ヲ見ケリ。人々目ヲタケリ。陽成院此事ヲ聞食テ、件ノ翁ヲ召テ、院司ニテ問セラレケレバ、「歳八十二成テ見物ノ志更ニ侍ヌガ、今年孫ニテ候男ノ、内蔵司ノ小使ニテ祭ヲ渡リ候ガ、アマリニミマホシクテ、タゞ見候ハンニハ人ニ歩（歩）、平仮名本諸本「ふみ」二作ル）コロサレヌベク覺テ、安ク見候ムタメニ、札ヲバ立テ侍ル。但、院ノ御覽ゼン由ハ全ク書候ハズ」ト申ケレバ、サモアル事トテ、御沙汰ナクテユリニケリ。是肝フトキワザナレドモ、カナシク支度シエタリケルコソオカシケレ。

こちらには、翁の立て札についての情報が、人々の間を情報のねじれをとめないながら、うわさとして伝わってゆくありさまが語られていない。また、翁が祭り見物にあたって巡らせた計略や振る舞い、院からの事情聴取の場での申し開きの内容や敬語の過剰使用などの言葉づかい等の描写は、簡略化されており、『今昔』にある、許された後の翁の得意げな様子も、『十訓抄』にはない。

#### 使用テキスト・参考文献

完訳日本の古典『今昔物語集』馬淵和夫・国東文磨・今野 達校注・訳  
小学館

新潮日本古典集成『今昔物語集 本朝世俗部』阪倉篤義・本田義憲・川端

善明校注 新潮社

新日本古典文学大系『今昔物語集』五 森 正人校注 岩波書店

『鈴鹿本今昔物語集 影印と考証』安田 章編 京都大学学術出版会（一九九七年）

『今昔物語集』——永遠の未完成の魅力——千本英史（『国文学解釈と鑑賞』・第七二巻八号・二〇〇七年八月）

『今昔物語集』の猿神退治——巻廿六第七話を中心に——池上洵一（『国語と国文学』・第五四巻一一号・一九七七年十一月）

『今昔物語集の人々 平安京篇』中村修也 思文閣出版（二〇〇四年）

『歌物語総合語彙索引』西端幸雄・木村雅則編 勉誠社（一九九四年）

日本古典文学全集『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』片桐洋一・福井貞助・高橋正治・清水好子校注・訳 小学館

『新編国歌大観』角川書店

古典文庫『十訓抄』（片仮名本）泉 基博編

新編日本古典文学全集『十訓抄』浅見和彦校注・訳 小学館